

作品名 「願いの理由」

「七夕の笹ってまだ残っていますか」

お客様に言われて、そういえば今日は七夕だなと思った

小さい頃は七夕が好きだった

幼稚園で友達と音頭を踊って、

「お花屋さんになりたい」と大きな笹に願いをかけた気がする

夜には願いを書いた短冊を窓の鍵にかけて、遅くまで空を見つめていた

何かを待っていた

サンタクロースと勘違いしたのかもしれない

当然誰も来なくていつの間にか寝てしまっていたけれど

今は待つことも、短冊に願いを書くことすらもなくなった

七夕も指摘されてから思い出すぐらいの行事になってしまった

願いは待つだけじゃ叶わない
それがわかってしまったからだろうか

仕事が終わった後、空を見上げた
曇り空で星なんか見えなかった

灰色に覆われた月を見ながら、私はなんとなく願ってみた

「生活が安定しますように」

子供のころとは違う、現実的な願いだと思った

願うだけじゃかなわないのは分かっている

だけど、不思議と唱えてみると気持ちが軽くなった

願いは一種の強さを与えてくれるのだと思った

短冊はないから、折り紙に書いてみようかな

私はまた七夕を好きになれた